

# 02

## 目指すまちの姿

1. 都市空間コンセプト  
「Well-Moving  
City SAPPORO」
2. 重点方針
3. 各エリアの目指す姿

## 第2章 目指すまちの姿

### 1. 都市空間コンセプト「Well-Moving City SAPPORO」

第1章を踏まえ、20年先を見据えた札幌独自の都市空間コンセプトを設定します。誰もがイメージしやすい言葉で都市空間を表現し、札幌の都市空間に関わる人々の共通のビジョンとなるよう、大切に使い続けていきます。

# Well-Moving City SAPPORO

～ いつでもどこでも誰もが心地よく、心も一緒に動くまち～



# Well-Moving City SAPPORO

季節：春夏秋冬  
時間：昼間(休日)

春夏秋冬、地上も地下も、老若男女関係なく、ここに住む市民はもちろん、一時的な来訪者でも、いつでもどこでも誰もが心地よく、心も一緒に動くまち、札幌。



この都市空間コンセプトには、単に人やモノの移動だけでなく“心も一緒に動くまち”を目指す意味を込めています。雪と共に生きる札幌だからこそ、地上も地下も、四季折々の風景のなかで、誰もが自然と「歩かさる」。その動きの中に懐かしさや出会い、発見や共感が生まれる。「Moving」には移動だけでなく、“感動”や“心の揺れ”という意味も込められています。暮らす人も訪れる人も、このまちで五感をひらき、歩くことが喜びになる。そんな札幌発の“心も一緒に動くまち”を目指します。

## 2.重点方針

都市空間コンセプト「Well-Moving City SAPPORO」を明確に推進するため、重要な要素を5つに分類し、行政だけでなく札幌の都市空間に携わる誰もが大切にするべき観点を重点方針として設定します。重点方針に基づく取り組みが相互に影響を与えあいながら各地域の魅力を高めていくことによって、“心も一緒に動くまち”を目指していきます。さらに、5つの重点方針について計測可能で明確な評価軸を設定し、ハード・ソフトを問わず施策効果の可視化や、関係者同士の合意形成などに活用することを目的として、評価手法を今後検討します。



図：5つの重点方針（修正作業中）

## (1) 「歩くことが楽しく、健康に暮らせる」

「歩く」ことは、単なる移動手段ではなく、歩行者にとって心身の健康を支える日常の営みであり、まちの魅力を体感する行為でもあります。歩道の整備や段差解消といった基本的なインフラの確保だけでなく、アイレベル※<sup>21</sup>の重要性から、まちなかに歩かさる要素、例えばカフェのテラス席や商店街のにぎわい、視界を楽しませるアートなどの仕掛けを通じて、歩行そのものを「楽しさ」や「発見」につなげていくことが重要です。

また、歩くことによって身体が活性化し、生活習慣病予防にもつながることから、まちなかの様々な場所にベンチ等の休憩施設を配置するなど、各々のペースに合わせて、無理せず自然と健康効果を高められるような都市空間を形成していきます。



写真：シャンゼリゼ通りのテラス席（パリ）



写真：鉄道廃線跡地を活用した空間（パリ）

※<sup>21</sup>...アイレベル：道路空間だけでなく、沿道建物の低層部など歩行者の目線に入る部分のこと



歩くことが楽しく、  
健康に暮らせる

## (2) 「居心地が良く、自分らしくいられる居場所がある」

都市空間には「気軽にいられる場所」が必要です。誰もがパブリックスペースに対してにぎわいを求めているわけではない、ということを認識し、カフェや商業施設のようなサービス体験や消費活動を前提とした空間だけではなく、屋内・屋外問わず何かをしなくとも居られる“余白”的ある場として、ベンチで本を読む、子どもと過ごす、友人と語る、ひとりでぼんやりする、こうした多様な過ごし方を受け入れる居場所こそが、まちの居心地の質を高めます。札幌の都市空間の中で、誰にとっても自分らしくいられる居場所が点在していることは、市民の幸福感を高めるうえで欠かせない条件です。

さらに都市空間は「偶然の出会い」を生む重要な場でもあり、自宅と職場・学校以外に人同士が交流する場（サードプレイス）としての役割も大変重要です。

パブリックスペースで人々が様々な活動を共有して、顔の見える関係性を築いていくことのできる空間も併せて推進していくことで、多様なニーズを受け止める都市空間を形成していきます。



写真：車道から転換した広場空間（バルセロナ）



写真：誰もが自由に過ごせる空き地空間



### (3) 「札幌らしく、四季を通じて歩かさる」

札幌の都市空間の特性の一つとして「季節の表情が豊か」であることが挙げられます。春の桜と梅が同時に咲く様、夏の澄んだ空気とみどり、秋の色彩、そして冬の雪景色、これらが日々の移動やまち歩きを彩る資源であり、都市の魅力でもあります。

しかしその一方で、特に冬季は寒さや積雪によって移動が困難になり、外出そのものが減少する傾向が見られます。したがって札幌の歩行空間には、四季を生かし、かつ乗り越えるための工夫が求められます。

例えば都心部では、地下ネットワークや沿道施設との連携などを通じて冬季も歩きやすい空間を創出することが重要です。また札幌市では毎年、市民・企業・行政など多様な主体によって約3万個のスノーキャンドルやアイスキャンドルが製作されていることがわかっています。冬季の景観向上や、製作作業を通じた交流機会の創出などの効果があることから、これまで引き継いできた冬の文化を大切に繋いでいくことが求められます。このように、雪を資源と捉えることで、雪が弱みではなく強みとなる都市を形成していきます。



写真：札幌駅前通地下歩行空間



写真：札幌駅前通のイルミネーション



写真：市民が製作したスノーキャンドル



写真：鴨々川と休憩施設

札幌らしく、  
四季を通じて  
歩きたくなる



#### (4) 「誰もが安心して、円滑に移動できる」

札幌市に暮らす人や訪れる人にとって、「安心して円滑に移動できること」は最も基本的で重要な要素です。例えば、国土交通省を中心に子どもの生活空間を守る「子どもまんなかまちづくり」が推進されておりますが、札幌市においても、通学路を中心として、さらなる安全対策の強化が重要です。また歩行者だけなく自転車通行空間の安全・安心を確保する必要性から、道路空間の再配分等により、これまで車道中心であった空間を歩行者や自転車中心の空間へ転換していくことや、過度に自動車に依存しないよう公共交通の利用を促すことが求められます。

誰もが安心して、円滑に移動できるまちづくりにおいては、高齢者、障がいのある方々、ベビーカーの利用者、観光客など、様々な方がストレスなく、安全で快適に移動できることが重要です。そのため、移動経路や建築物のバリアフリー化に加えて、わかりやすい案内サインの設置やスマートフォンを活用した情報発信、心のバリアフリーの推進など、官民連携によるユニバーサル※<sup>22</sup>なまちづくりを進めていく必要があります。

ユニバーサルなまちづくりの推進にあたっては、文化・言語・国籍の違い、老若男女と言った差異や、障がい・能力を問わずに利用できるよう配慮された設計（デザイン）を指す「ユニバーサルデザイン」の考え方の積極的導入が不可欠です。

また、ハード・ソフトを問わずに個々の事業推進に際しては、誰もが安全・安心に利用及び参加できるよう、事業計画の初期段階から積極的に当事者参画を進め、様々な利用ニーズ等を聴取しながら取り組みを進めていく必要があります。

こうした取組を通じて、札幌市が目指す「誰もが互いにその個性を尊重され能力を発揮できる、多様性と包摂性が強みとなる社会」を形成していきます。



写真：段差の無い横断歩道（バルセロナ）



写真：歩行者専用に転換した通学路（パリ）

※<sup>22</sup>…ユニバーサル：第2次まちづくり戦略ビジョンにおけるまちづくりの重要概念の1つで、誰もが多様性を尊重し、互いに手を携え、心豊かにつながること。また、支える人と支えられる人という一方向の関係性を超え、双方向に支え合うこと



## (5) 「環境に優しく、みどりとともに暮らせる」

札幌の魅力である「みどり」は、良好な景観形成、生物の生息・生育の場の提供、健康・レクリエーション等の場の提供、延焼防止、地球温暖化防止など、環境面、地域振興面、防災・減災面において多様な機能を有しています。※<sup>23</sup>

さらに、次の世代に魅力的な都市空間を引き継いでいくため、札幌市が目指す「ゼロカーボンシティ」の実現に向けて、「移動の脱炭素化」や「都市緑化の推進」「コンパクトな都市づくり」を進めていくことが重要です。また、国土交通省では、「道路分野の脱炭素化政策集」を公表しており、「低炭素な人流・物流への転換」を「基本的な政策の柱」と位置づけ、ハード整備と利用促進のためのソフト施策を両輪として、新たなモビリティ、公共交通、自転車、徒歩等の低炭素な移動手段への転換を促進し、国内のCO<sub>2</sub>排出量の約18%を占める道路分野※<sup>24</sup>について、中期目標として、2030年度において、温室効果ガスを2013年度から46%削減することを目指しています。

札幌市においても、公共交通の利用促進や、道路空間の再配分等による自転車通行空間の確保等により、自家用車に過度に依存しないまちづくりへの転換を図ることが求められます。さらに交通面の対策のみならず、コンパクトな都市づくりによる「歩いて暮らせるまち」を推進することが重要です。

こうした取組を通じて、人々が多様な機能を有する「みどり」を身边に感じながら暮らすことができる、持続可能な都市空間を形成していきます。



写真：道路空間の緑化（バルセロナ）



写真：エッフェル塔付近の緑化（パリ）



写真：自転車の利用促進（道路分野の脱炭素化政策集より）

※<sup>23</sup>…出典：札幌市「都心のみどりづくり方針」より

※<sup>24</sup>…道路分野：道路利用約15.9%、道路整備約1.3%、道路管理約0.5%の合計

環境に優しく、  
みどりとともに暮らせる



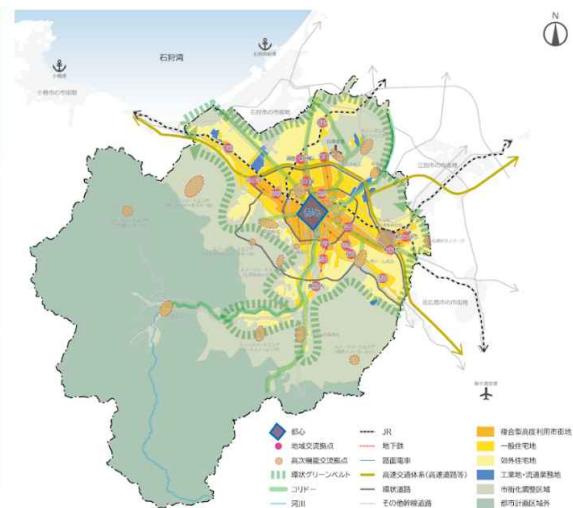
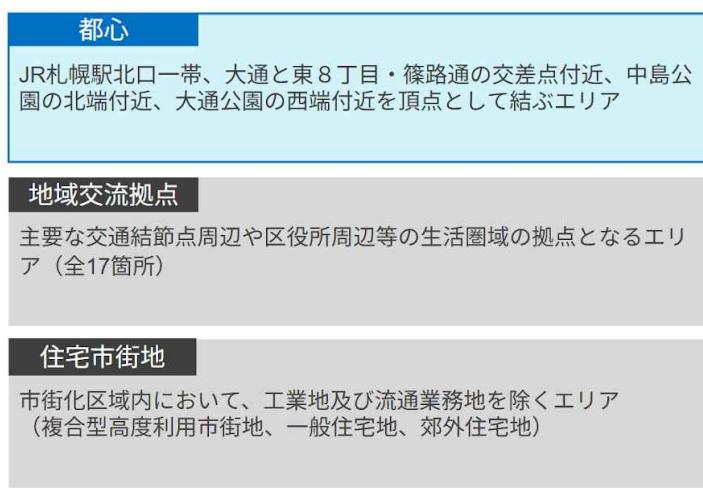
### 3.各エリアの目指す姿

「Well-Moving City SAPPORO」の実現に向けて、特性の異なる「都心」「地域交流拠点」「住宅市街地」3つのエリア毎に目指す姿を設定します。

また、各エリアにおいても目指す姿は一つではなく、季節や時間帯、さらに入れぞれで異なることから、人々の活動に着目した複数のシーン（風景）を具体的に描き、その集合体をもって本ビジョンが示す目指す姿とします。

#### （1）都心の目指す姿

都心における目指す姿を設定するにあたり、「Well-Moving City SAPPORO」の実現に向けて、都心エリアが果たす役割を整理します。以下は、「第3次札幌市都市計画マスタープラン」上の分類を示しています。



#### ① 「都心」が果たす役割

都心は札幌の「顔」であり、都市のアイデンティティと国際競争力を象徴する中枢的空间です。「Well-Moving City SAPPORO」においては、都心エリアが、歩いて魅力を実感できる最先端の象徴空間として機能することが期待されます。ビジネスや観光といった多様な都市機能が凝縮され、同時にそれらを「歩くことで体験できる空間」に転換していく必要があります。

たとえば、札幌駅前通や大通公園など、特に札幌を象徴するパブリックスペースにおいては、時代に合わせた更なる魅力向上を図ることが求められます。また、四季を通じて快適に移動できる地上・地下の重層的な歩行ネットワークの充実による回遊性の向上や、中通りに着目した新たな魅力づくりも、都心部における重要な役割です。

札幌市民だけでなく、多様な来訪者にとって特別な体験ができる都市空間の形成を進めることで、都心はより魅力的な象徴空間となり、世界に向けた「札幌らしさ」を発信する基盤となっていきます。

## ② 「都心」の目指す姿



### ③ 地上と地下を最大限に活用して季節を楽しんでいる風景



この街の冬にはいろんな色がある。

青空の下、ピリッと冷えた空気を吸い込み、季節を感じて歩くとき、常緑の温もり溢れる空間で、無為な時間を過ごすとき、どんなときでも、老若男女、人それぞれに、思い思に、どこかに居場所を見つけられる。

四季を通じて楽しめる街並み。

### ④ 魅力的な沿道・歩道空間で誰もが日常を楽しんでいる風景

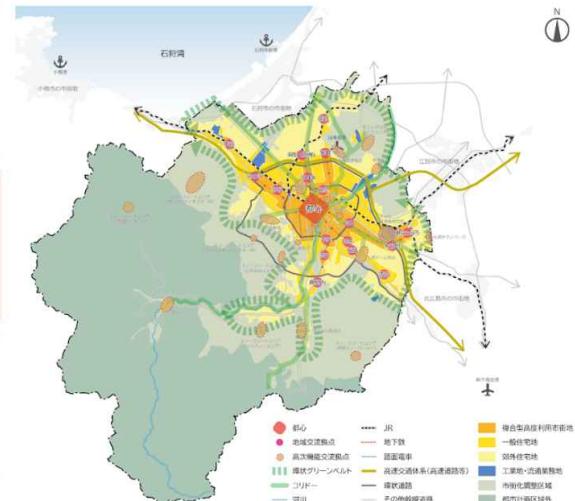
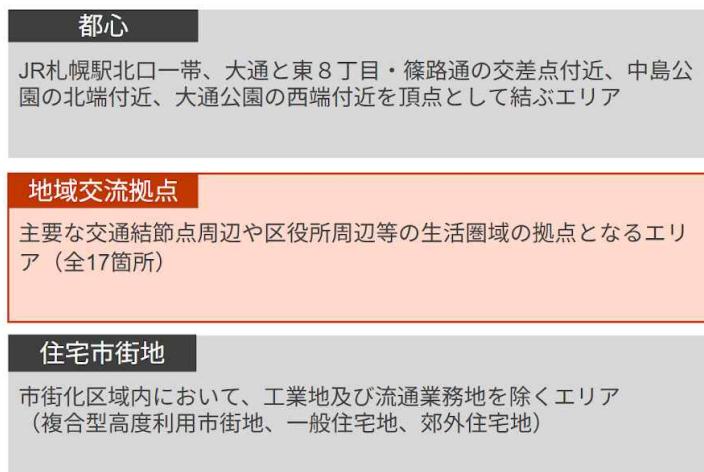


道と街の境界線を、みどりとゆとりが緩やかに繋ぐ。

道行く人も、働く人も、くつろぐ人も、もてなす人も、みんながそこで自然に交わり、積み重なったにぎわいが、心地の良い喧噪を生む。視線を向けた光景すべてが、切り取りたくなる、ユニークで楽しい街並み。

## (2) 地域交流拠点の目指す姿

地域交流拠点における目指す姿を設定するにあたり、「Well-Moving City SAPPORO」の実現に向けて、地域交流拠点エリアが果たす役割を整理します。以下は、「第3次札幌市都市計画マスタープラン」上の分類を示しています。



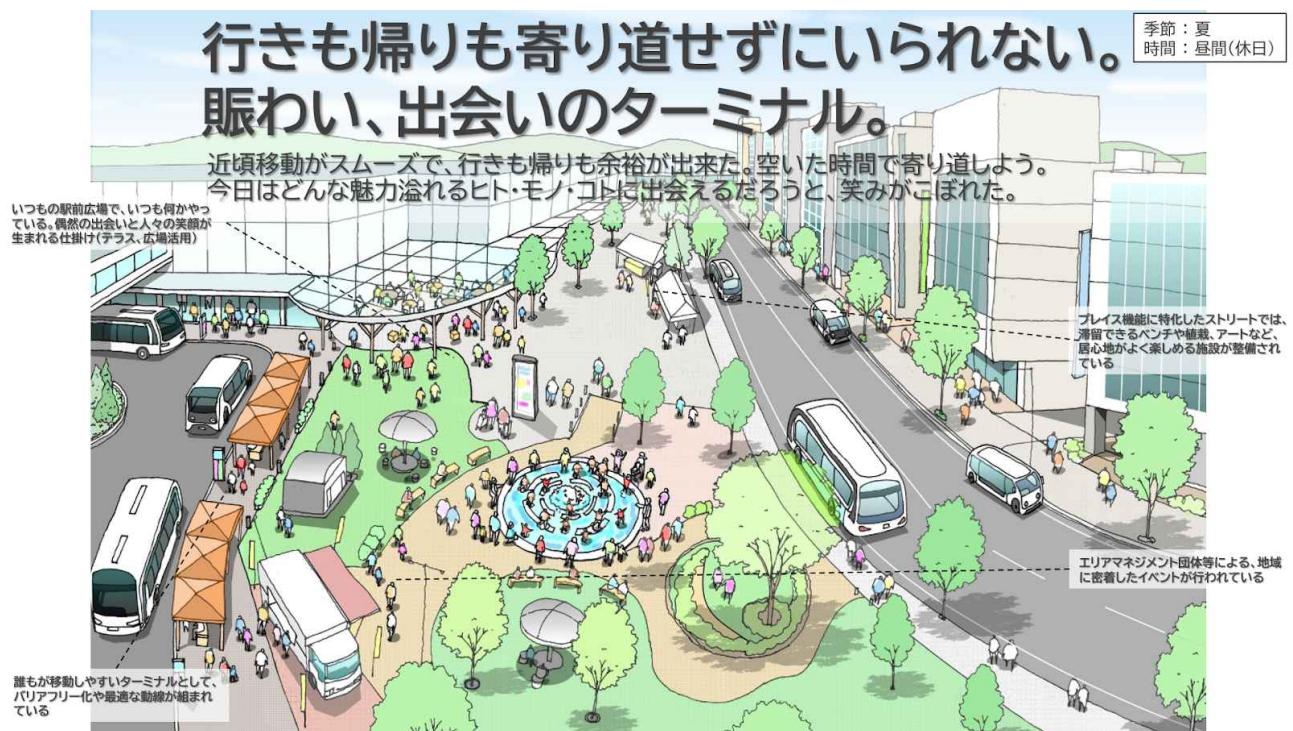
### ① 「地域交流拠点」が果たす役割

地域交流拠点は、市内の各生活圏域を支える地域のハブ的な役割が求められます。「Well-Moving City SAPPORO」においては、地下鉄駅やバスターミナル、区役所など多様な機能が集積するこのエリアが、豊かな生活環境を支える拠点として機能する必要があります。

特に「第2次札幌市立地適正化計画※現在策定作業中」においては、地域交流拠点など都市の拠点となるエリアに都市機能誘導区域を定め、誘導施設の集積に向けた各種誘導施策を講じることとしていることから、誘導効果を相乗的に高めるためにも、周辺道路や広場等のパブリックスペースにおいて、人々の交流が誘発される仕掛けや回遊性を向上させる取組を推進することが重要です。

都心のような高度機能の集積ではなく、特に「日常に根差したにぎわい」に着目し、市民の愛着と地域力を支える「人々の顔の見える地域拠点」としての役割を担います。

② 「地域交流拠点」の目指す姿



### ③ 快適に移動ができ、待ち時間さえも楽しんでいる風景



毎日の通勤、通学、買い物も、出張、観光、初めてとなる訪問も、あらゆる流れが整えられて、快適に移動ができる過ごしやすい街。乗り換えて空いた時間や、待ち時間さえ楽しめる、様々な街の仕掛けが、市全体の魅力をつなげ、高めるための要となる。

### ④ 自然と歩みが遅くなり、思わず寄り道をしてしまう風景



この街を訪れたなら、寄り道せずにいられない。  
道路まで溢れ出す街の魅力に、自然と歩みが遅くなる。  
食事に買い物、面白そうなイベントも、少し歩けばみどりを楽しむことさえ出来る。  
今日はどこに寄り道しよう。日々の移動に彩りを加える、地域の交流拠点。

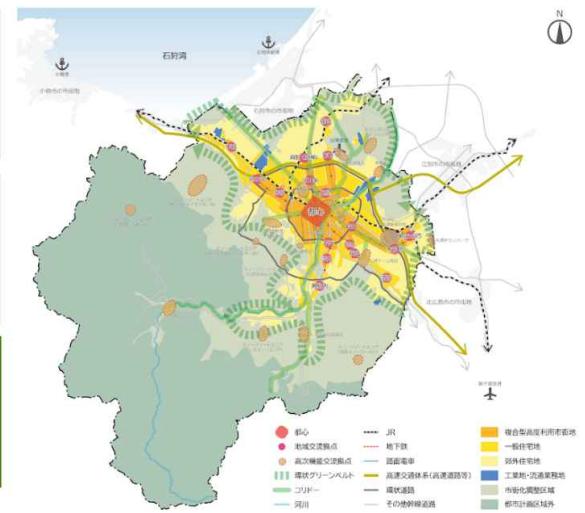
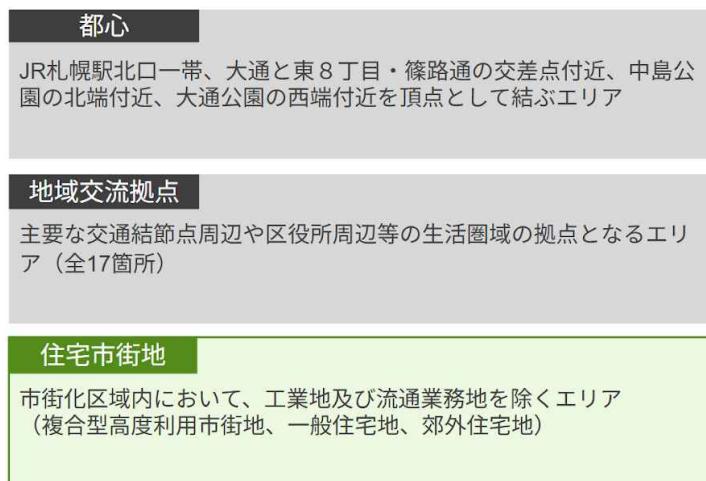
⑤ 屋内外を行き来しながら冬を満喫している風景



冬はどうしても、屋内に籠もりがちになるもの。  
それならば、籠もれる場所にバリエーションを。  
冬の街から、温もりのある屋内へ。  
食事や買い物、イベントを一通り楽しんで、暖まつたらまた外へ。  
雪を楽しみ、限界が来たら、次の場所。  
そして自然と、冬を楽しむ人たちが集まっていく。

### (3) 住宅市街地の目指す姿

住宅市街地における目指す姿を設定するにあたり、「Well-Moving City SAPPORO」の実現に向けて、住宅市街地エリアが果たす役割を整理します。以下は、「第3次札幌市都市計画マスタープラン」上の分類を示しています。



## ① 「住宅市街地」が果たす役割

住宅市街地は、札幌市民の暮らしの基盤であり、まち全体のウェルビーイングを支える最も広域かつ根幹的な空間です。「Well-Moving City SAPPORO」においては、誰もが安全に、自然と歩かさる「日常の風景」をつくることが目標です。

複合型高度利用市街地では、商業施設、駅へのアクセス性が高く、歩いて完結するライフスタイルを支える機能集積と空間整備が求められます。一般住宅地や郊外住宅地においては、安心して歩ける歩道整備、通学路の安全、コミュニティ空間としての公園や緑道の活用、冬の歩行環境対策が重要となります。

また、子ども・高齢者・障がいを持つ方など多様な市民が安心して出歩ける都市空間を整えることが、このエリアにおける最も重要な要素です。地域内での安全・安心な徒歩移動が可能になることで、生活の質の向上と地域社会の利便性向上を同時に図る役割を果たします。

## ② 「住宅市街地」の目指す姿



### ③ 子どもも親も安心して楽しく歩ける通学路の風景



子どもたちが毎日歩く通学路。  
安心、安全はもとより、学校に行くため、  
出かけることそれ自体が、楽しみとなる様々な仕掛け。  
それは、子どもたちだけでなく、この街に住む誰もが、安心、安全に、  
気兼ねなく出かけたくなる街の雰囲気を作っている。

### ④ 誰もが思い思いに過ごしている身近な公園の風景



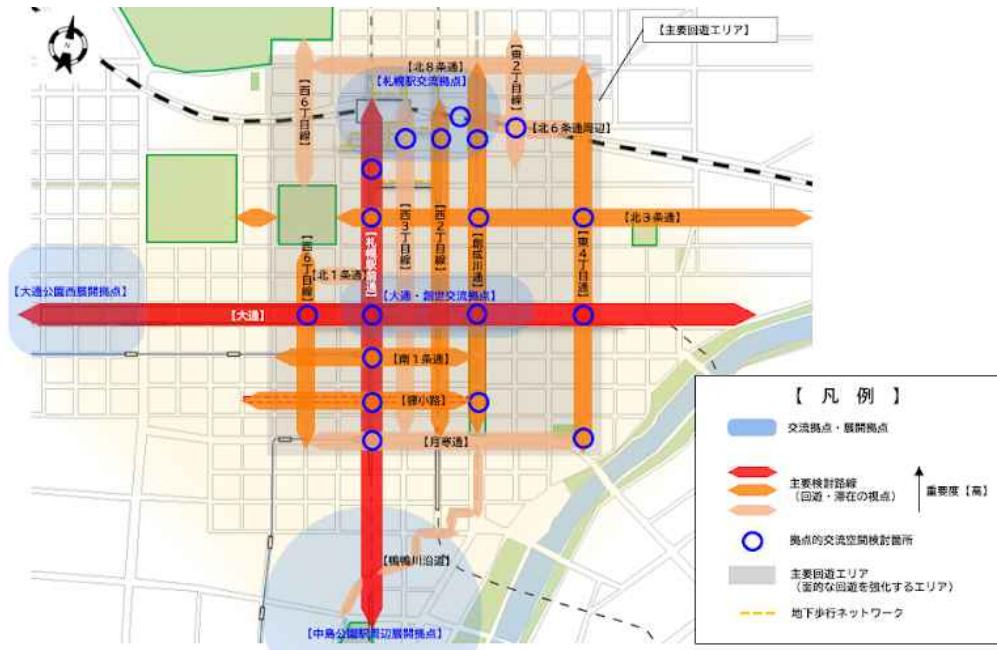
誰もが自由に利用できる公園は、誰もが思い思いに過ごせる場所。  
子どもたちの遊ぶ声。キッチンカーでランチ。  
健康作りの運動も。ひとりでも、みんなでも。  
絶え間なく賑わう広場を見渡せば、誰もが充実した表情だ。

## コラム：「第3次都心まちづくり計画における空間形成検討について」

### (1) 主要検討路線等の選定

※第3次都心まちづくり計画の検討状況に合わせて適宜修正予定

都心のまちづくりの指針である「第3次都心まちづくり計画」において、都心のウォーカブル施策の推進にあたっての基本方針や空間形成指針等を示しています。具体的には、回遊・滞在機能と交通機能のバランスの適正化などに配慮しつつ、都心全体の回遊・滞在の視点での主要検討路線等を位置付けています。



### (2) 主要検討路線等における今後の検討の考え方

上記の主要検討路線等について、求められる機能や重要度等を踏まえて、以下の考え方に基づき、本ビジョンの第2章に示す「都心の目指す姿」の実現に向けて取組を検討・推進します。※詳細は第3次都心まちづくり計画参照（URL追加予定）

凡例(前頁参照)	今後の検討の考え方(案)	参考事例(一例)
 主要検討路線	<p>○ 通りに求められる機能や重要度等を踏まえて、下記を参考に地域や沿道等の関係者と将来像を共有し、取組を検討・推進する</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・人中心の魅力的なストリートの実現に向けて、道路や沿道が一体となった空間形成を目指し、ハード・ソフトの両面から取組を推進する。</li><li>・四季を通じて安全・安心な歩行環境の充実を図るため、まちづくりの動向等を踏まえて、地上・地下の重層的な歩行者ネットワークの拡充を図る。</li><li>・歩行者・自転車の通行や沿道へのアクセス環境に配慮しつつ、既存の道路空間の有効活用を図る。</li></ul> <p>【参考事例】 ・北3条広場、御堂筋将来ビジョン…フルモール ・大手前通り(姫路市)、富山駅社会実験…トランジットモール ・南1条通社会実験、萱南南54号線…歩道空間の拡幅</p> <p>【参考事例】 ・札幌駅前通地下歩行空間 地下街…通行(回遊) + にぎわい 等 ・北8西1地下通路…通行(回遊) ・因幡町通り地下歩道(福岡市)…通行(回遊)</p> <p>【参考事例】 ・三宮中央通り…パークレットの設置 ・さっぽろシャワー通り…ベンチ等の設置</p>	
 拠点的交流空間検討箇所	<p>○ 地域の活動や回遊を生み出す拠点として、骨格軸等の主要な通りの結節点において、官民が連携して魅力的な空間の創出を検討する。</p> <p>【参考事例】 ・狸二条広場、Ginza Sony Park(暫定利用) 【参考事例(沿道施設における滞留空間)】 ・ココノスキノ、4丁目PLACEなどの公開空地 【参考事例(辻空間の魅力化)】 ・創成川公園(街路樹やプランター、ベンチ等の配置)</p>	

#### 【参考事例】



【参考】御堂筋将来ビジョン  
(大阪市)



【参考】トランジットモール社会実験  
(富山市)



【参考】萱南南54号線  
(神戸市)



【参考】因幡町通り地下歩道  
(福岡市)



【参考】パークレット  
(神戸市)